

和州松川園志

三

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



511
32825

利根川圖志卷三

下總 布川 赤松宗旦

義知



新利根川 寛文二壬寅年押付松木行徳今この二村廢して押付

の名を中田切等の地を鑿りて新川を十六島不達す開

村々印幡沼北畔不於て替地を賜かくて布佐の高臺と布川の

間不堤して川を塞ぎ今この處をシ水を新川不入る寛文六

丙午年不落成す然れども太直不して水竭き易く舟行不便を

りざるを以て同九己酉年塞を去り新利根川の口を塞ぎ別に

羽根野の水門を開き蠶養川の水をせき入れ用水の便とす明

る十庚戌年功畢る後天保十丑亥年この堰を豊田村同十一辛

亥年より十三癸丑年まで大堤を修成す以前ハ敷七尺許寛保

二年壬戌洪水不壊りる間部若州彦與りて修補す築下總州新

及分流支派之堰延袤二十五里首自下總州相馬郡河原代村押

付新田腹接常陸州河内郡尾距下總州杏取郡結佐村とその總

督ちり―植田左仲命結ぐ羽根野 明三年癸亥四月功成る

奥山 新利根川 蠶養川の間ある一帯の丘山の上不在りこれを

下れば常陸の龍崎等すへて一望の平地ありこの地始ハ岩を

置きて布川の豊島家より守り―が後龍崎土岐大學小奪ハれ

―を上の付城有り―と見ゆ岡見中務少輔信貞 常陸國河内郡

の長臣栗林下總守義長が計ふて土岐不乞ひて布川不還附せ

り

常總軍記卷十六云行方の合戦ハ兩土岐利なく―て歸陣せ―

が土岐大學諸臣を集めて申―はるハ 中畧 この河内郡ハ下總

國相馬の北郡不隣り―くハ 文間原唯一重不―て敵地不近―

爰不府川の横須賀の奥山ハ本注私曰今横須賀奥山村と卿を

無く横須賀の奥山あり横須賀も府川の須賀の横系るの名ハ

り須藤堀といふ村その頃ハ無―に此ハ 生馬の領地と為て御弓組と

ハ龍崎不居とる所ありとぞ今ハ仙臺家の領地といふとあれハ何

ハ後年出來―中畧村ありこの所常陸下總の境ふて文間原と

ハ頃ハ無之といふ村と新田あり―て行徳新田とて後不出來てそ

ハ谷中あり文の間大明神圓明寺は今の立崎中谷羽中福木以下ハ悉

ハ高砂佐沼皆原あり圓明寺ハ千葉の建立あり文間明神ハ

ハ古横須賀府川の豊島紀伊守が次男ふて半之允岩を構へ―り

ハ分あり伊守頼繼その子主水 彼を追落―て奥山を出張とすべ

ハ頼言その弟半之允といふ 彼を追落―て奥山を出張とすべ

ハ奥山不籠り當地を窺ふ不於てハゆく―き難義あるべ―この

事如何ありむと評定すいづれと承りて至極せ―御事あり何

ととあれ兵を出―て一攻―て通塞を御覽可然と申―たれば

然りハとて諸岡角三郎 左衛門が 大野大隅淺野 一郎右衛門森

左京中島權亮を大將と―て三百餘騎不て押懸ル―りこの所

龍崎より相隔―る事一里許あれハ道の難處も無く攻付れと

りかぬて隣國の境目あるれば油断すべき非ずとて常不遠見の櫓を上らばて兵を付らて置きたり若異變ありバ螺を以て知りむべしと號令を施したる故番兵どもこれを見て急不螺を吹立て告ぐらバすハや敵こそよせされとて砦ハ大不騷動す砦の主豊島半之丞固より名を得し勇士ふて鎧取て投懸け十文字の鎗押取て馬不打乗り者共續けし北坂不乗出して戦ひらバ我どくと家人共甲冑を帯して北坂不向ひたりその勢漸五十人ふハ足りざりなり半之丞眞先かけて嵩より追落しられバ土岐勢ハ坂下不在り殊不この頃雨下りて赤土交ある滑坂されバ働自在ありずして討さる、者多くとつと崩れ敗北せりあハや城方討勝つべかりなるふ半之丞運や盡きまりとむ誰射るとも無き鶴羽の夫矢一飛來て半之丞が右の膝口不ずバと立つ痛手ありにればさしもの半之丞とまわり

ずして馬より落ちたりなる土岐勢ハこれを見て大不勇を爲し守返して攻上る城方ハ色を失ひ半之丞を介抱して砦不引返す固より纒ある小勢と雖半之丞勇敢の者不て戦ひさる故ふこそ勝利ハ得され大將深手を負ひらバ残る面々度を失ひ足弱を引連れ半之丞を宥し引掛らて府川砦不引返せりこの時府川の豊島紀伊守ハ折悪く千葉が小金の矢葺大膳が雌伏せざるを攻むべしと紀伊守と成田の成田八郎武田左近等不下知しされバ彼處不在陣して留守ありなる不嫡子主水ハ所勞不犯され惱目し居られバ勢を集むるふ以の外不勢不て漸三十人許あり兩手の勢を合ハするとと土岐勢不ハ掛合ひ難く殊不兩大將共不かくの如くなりらバせむ方無く若や府川をも攻むへきふやと根本平六横田庄九郎白井半大夫等の家臣下知して手配して待ちらども土岐と戦疲れられバ

奥山を乗取り一計して勝鬨をあげ砦を引入りこの由龍崎へ
注進して敢て存川をバ攻めざりける

文間明神社 兩社あり西あるを角宮といふ額蛟蛸神東を奥宮
といふ正一位文間大共立木村不在り丘山の上ありこの丘

木奥山大明神と有り
西行して新利根川の入口を終る即延喜神名式ある相馬郡
の蛟蛸神あり惣國風土記下總國相馬郡部云蛟蛸神社主田

三十九東三畝田所祭罔象女也天平二年庚午六月始奉主田神
事式祭等始也諸國圭齊録下總國部云五十石文間大明神領

相馬郡布川卿立木村友野因幡國花萬葉集卷十下總國部云文間明神社
領五十石 神主 友野因幡國花萬葉集卷十下總國部云文間明神社

交代す神主 友野因幡國花萬葉集卷十下總國部云文間明神社
燒といふ事あり寅時許神前の篝火にて舊き御座の絹を焼く

奉納 蛟蛸の蛸ハ罔象の義ふとれる字あるが後ハ蟲旁カ
す

不書きとるが更ふ轉じて文間と爲り一なるべし

布川 古ハ存川と書きて豊島家不有千葉家不屬一數軍功あ

り一が常總軍記卷十五千葉家濫觴條云滑川龍臺の織田左京

男頼定を退退け銚子より海上に取旗千葉印幡北相馬を取

り安食上下利根を限り八里を攻掠旗下一族最多助崎

寺臺大倉小見川東米野井長沼存川横須賀荒海布佐大森飯岡

馬加六須賀圓城寺村田山部森戸神崎藤崎飯高橋木石橋小石

橋廣岡青木伊能尾金田林長澤印西ハ口を限ふ旗下家臣夥く

四月上旬畧總州の千葉介利胤ハ畧村岡河原不著馬龍崎土

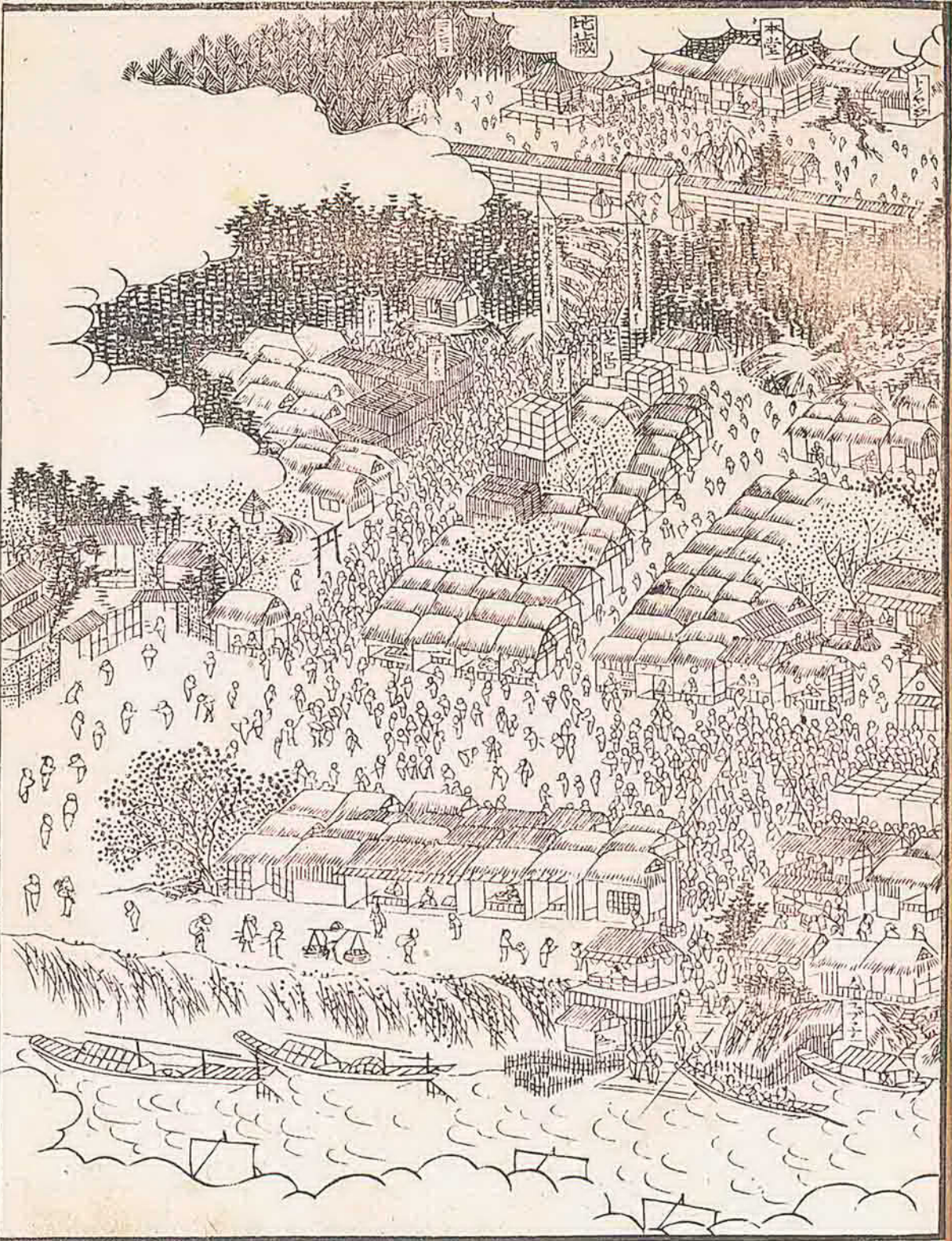
守谷布川築田一色小山近藤等の味方を待受け云龍崎土

岐家不奥山砦を奪ハれ一不因りて援兵を乞へども果さるる

時常陸國河内郡足高ある岡見中務少輔の長臣栗林下總守義
長の計不因て岡見家不屬一その後小田原北條家不屬一その
落城の時同く家絶えたり鎌倉九代後記小田原籠城人
布川ハ一帶の丘山を背ふ一前ハ利根川不臨こて街衢を列ね
人烟輻湊して魚米の地と稱する不足れり舊地ハ山の西北殊

地藏市
十月廿日より廿七日まで
あり

カトリック



三
川北

五

不六月十四日の宵祭八月十日の金毘羅角力十月廿一日の地藏祭等ハ詣人村々より來りて雲の如く燈ハ町々不照一つれ
て月の如く魚ハ一帆の風を使って鈿子より輪すべく酒ハ一葉
の力を借て江戸より運ぶべし大率その時すべて醉人あらざる者無れれども昇平の化不浴して敢て狂せず小女ハ砂糖齋
不飽きてその他を末むる事無し山不ハ金毘羅社西端不建ち
て城の大手と覺し道を夾て乾隍の狀あり次不德滿寺有り樹
間不利根の行舟を眺み遙不手賀の沼水を見る場町不て古の
馬場の中ほと不來見寺あり最も可畏古迹あり東端不産土神
あり句々廻馳命を祭るといふ又姥神の石祠を濱宿の首不建
つこれハ新井照信の女あり石祠ハ内宿濱宿の境南側不在り高五尺許町不ハ内宿
濱宿中宿上柳宿下柳宿馬場町あり渡場ハ内宿の川端不在り
て魚屋場不相並び向不布佐を望む風前不酒客の喉を鳴りす

有り月下不騷人の舌を鼓する有り是を以て舟不下りてハ流
不枕すべく岸不上りてハ石不漱ぐべし而して後の山を望み
てハ豊島と新井の盛を想ひ前の川不臨みてハ千葉と岡見の
争を歎すけ不蝸牛の角石火の光あるべし今昇平の化不浴し
てかく暖不衣飽くまで食ふハ誰が恩ぞや

江戸の方言はるし雪の富士

海珠山德滿寺 眞言宗常陸國信太郡大岩田村法泉寺末あり開
基詳あらず元龜年中祐誠上人中興すといふ本尊地藏菩薩湛慶
作御長七 毎年十月廿一日より廿七日まで開帳して諸人不拜
尺三寸 毎年十月廿一日より廿七日まで開帳して諸人不拜
せしむその間詣人羣集し商旅來會すこれを地藏市といふ諸
國圭齋録下總國新義眞言部云二十石 相馬郡布川村 德萬寺
金毘羅社 地藏堂の西不在りその間路の左右不乾隍の迹あり
されバこの地城の大手あるべし境内不空居心經碑あり又こ

この地ふ於て毎年八月十日祭禮相撲ありていと賑へり
べつとりと人のある本や官相撲 一茶

瑞 龍山來見寺

龍海院と號す開山獨峯和尚

天正十士諸國主齊

録下總國曹洞宗部云三十石

相馬郡布川村

國花萬葉記卷十下

家寺領常總軍記卷十六云今布川ハ布川と改む來見寺といふ

禪寺あり下妻多寶院の末寺小て曹洞宗あり御朱印三十石あ

り昔ハ頼繼寺といふこれ紀伊守の建立あり天正十八年御入

國の後布川と改む頼繼寺と來見と改むとあり是ハ御入國有

て御巡見の折柄此處へ來りせむひ縮川る類して布川ふて可

然之頼繼ハ我來見の上ハ來見寺とつくべしと上意あり 中畧

又この寺の住職ハ昔遠州ふて能く知りせむひ僧ありしう

ハ望を申すべしと仰有りしが堅固の道心入ふて嘗て望ふし

と申上ぐる故一ハ御賞美ましくて庭前ふ小き松の有りぬる

を御所望ありその代として梅を社トまり今ハ御城矢來御門

の内ハ梅替松として大木あり又來見寺ハ松替梅として本堂の前

ふ在りこの梅ハ御朱印三十石を社トといふ因て布川の事を

松替里といふ由あり布川ハ御入國以後松平五左衛門近正ハ

下さる境内阿弥陀經碑背ふ下總州相馬郡布川村瑞龍山來見

寺河城主豐島頼繼開創城主夙慕洞山門風聞下妻多寶院四世

獨峯和尚在小田原最乘日有降魔瑞而屈請和尚以為開山第一

座開堂日寶有神龍雨之瑞故以為山號取城主諱以充寺號表

轉輪不退德三世日和和尚者參州岡崎人既為龍海院住侶也其

是故蓋與官有舊知以慶長九年三月十五日賜寺領御朱印某

年御狩之日輿輦臨本院賞寺庭松樹與寺外河水廻流委蛇如敷

白布曰有河布川頼繼來見呼音相近今日來見白布廻流委蛇如敷

住持僧替庭松樹以御愛梅樹葦松樹移植之於御本城今本院乃

尊崇御松替者即是也當時拜賜文衡山畫幅及御饌點茶供具

頼繼寺奉寢基知乃事

三川北

七

一 宇西の内作屋々 十五貫五百文

一 同所大森の内 二貫八百文

一 存川の内 十貫五百文

一 文間早尾の内 三貫七百文

以夜頼継寺被開基三付至子孫存之知乃

多お遠可奉付如件

永禄二年七月廿四

拜進頼継寺
衣衾役者中

頼継判

按小豊島家の事常總軍記卷十六云豊島紀伊守ハ清和源氏ノ
一 最名家あり 中畧 源三位頼政の子孫といへりこの時ハ高
七千石あり一とや今押付上江下江上曾根下曾根早尾大平
北方羽黒横須賀等の村々有りその頃ハすべて存川領ふて
紀伊守が領地あり

又舊家新井氏あり同書卷十九ふその來由を載す云爰ふ常州
新治郡小野崎の新井縫殿介ハ小田天庵の旗下ふて有り一
藤澤籠城の時籠りて没落せしが固より武勇の者ふて天庵の
危急を見あかりこの儘暫居せむハ勇士の爲ざる所ありと思
ひ又々土浦ふ來り持口を固めむと申しぬる故一うと大切
る搦手間部臺を固め忠戰を勵まし落城の時切抜けて歸り
本注この新井が先祖ハ岡見の先祖栗原太郎信勝の七男新
井七郎信厚が末あり中畧常州小野崎といふハ新治郡の内
ふして谷田部と土浦の間ふて土浦より然と雖天庵滅亡せり
ハ遠一谷田部よりハ近き處あり下畧 然と雖天庵滅亡せり
れ一うバ自立もあり難く佐竹多賀谷ふ降らむと口惜と思ひ
ぬる爰ふ下總國北相馬の存川の主豊島紀伊守頼継ハ姨キハ嫁ふ
して頼継が悴主水半之丞とハ正一き從弟あり姨も戀ひ一く
存川へ落來りぬるふ他人ありされバ差置きぬり
按ふこの後客分と爲り陣代をも勤め軍功も有りて終ふ一分

の主と爲り一あるべし今その家存して系圖并ふ古文書數通を存せり下に載す

系譜を按ずるに清和天皇三代武藏掾源滿季男栗原式部後胤栗原太郎信勝之常元平治之合戦官軍屬甚有軍功勇名依り之ハ信家太郎信春野中瀨二郎信田三郡給之代々領之十子有于坂信秀沼尻五郎信政山口六郎信厚新井七郎信井野口八郎信吉栗林九郎信道岡見十郎信厚新井七郎信光野住于野口信吉栗林九郎信道岡見十郎信厚新井七郎信の後照信の代よりこれを寫す

信厚十七代後胤初信治 新井縫殿介 常陸小野崎城主

信厚以來代々仕小田家也小田讚岐守天庵氏治公十五代而天正二年二月廿七日爲佐竹氏令落城滅亡矣依之引退小野崎之城而住居于總州相馬郡付川矣奉遷座氏神白山權現令崇敬也其後通心於小田原八王寺城主北条陸奥守平氏照公屬幕下一萬石給之矣改號新井治部少輔源照信馬當家守本尊同郡柳戸外觀世音菩薩也天正十年二月廿五日年六十而死

女

性端嚴美麗絕久容貌眉目如畫見者肅然改容矣天正三年二月夜曉利根之河端脫置行方不知依之數日雖尋河之上下水底更不見故上之曰我從龍宮假現照信之女在此界十二箇年後來可守新井之子孫繁榮云依之當家奉崇敬氏神則今姪女神官此也

照治 初治部大輔 後但馬守

永録七甲子年於于同國國府臺房州里見義弘兵發與小田原戰時照治相隨相馬郡之軍勢被定于裏伐之大將忽里見取走照治從途中歸陳矣天正年中於于同國印西野氏照公催猪狩時牧場惣掛之役蒙仰也且氏照公鷄子獻上之御祝喜之餘御直書給之矣其外至松田尾張守狩野一菴宗圓皆川山城守皆川將監佐瀨七右衛門青野大藏牛田作右衛門増田新七等數多諸書物有之矣天正十八年豐臣秀吉公小田原發向此時氏照公小田原令籠城也與中山勘解由介并一菴共八王寺城之中曲輪守之討手大將加賀筑前守利家同利長打向大戰天正十八年三月廿三日終令落城自殺也

信親 兵衛三郎

氏照公軍用諸荷物商賣奉蒙仰小田原往來之親船一艘四十馱之御朱印被下置無患令進送通路也

繼信 初信重 治部

天正十八年小田原落城之後、尚令卒人、住于府川、府川古昔之城、主豐島刑部頼繼、天正十八年與小田原公共登山、高野山、慶長四年七月、繼之一字給之、則號繼治、後來子孫繼之意、故給繼之字矣、文祿三年、江戶蒙將軍家之命、諸國檢斷所相迎、至寬永十三年、諸色御用專勤也、于今御黒印數通有之矣、寬永十八年二月十七日卒、葬于來見寺、

以下畧之

今も代々の墓來見寺に存せり又系譜にいへる白山宮ハ來見寺より西方ある山下に在り柳戸村觀世音ハ手賀沼の南に在り姪女神宮ハ布川内宿濱宿の境ある家の側不在り

所藏古文書現存十通 北條氏照書翰 狩野一庵 同

皆川山城守 同 皆川將監 同 牛田作右衛門 同

青野大藏 同 豐島頼繼一字書附

天正九年辛巳六月三日船一艘十疋十駄書附

同十五年丁亥九月七日傳馬一疋書附

寬永五年戊辰四月廿六日傳馬一疋書附

以上

布川大明神 來見寺より東方山端に在り馬場町の上あり祭神

句々廻馳命例祭六月十四日ノ切の假殿に神輿を出す十五日

屋臺等を出し甚賑へり十六日神輿本殿に歸る時境内に尋撞

の舞あり先庭上り船形を造るこれを御船といふこれに帆柱

を立つるをツク柱といふ長八舞人兩蛤の面といふを被り立

附をたき竹弓を持ち柱に上りその上にて種々の状を爲す觀

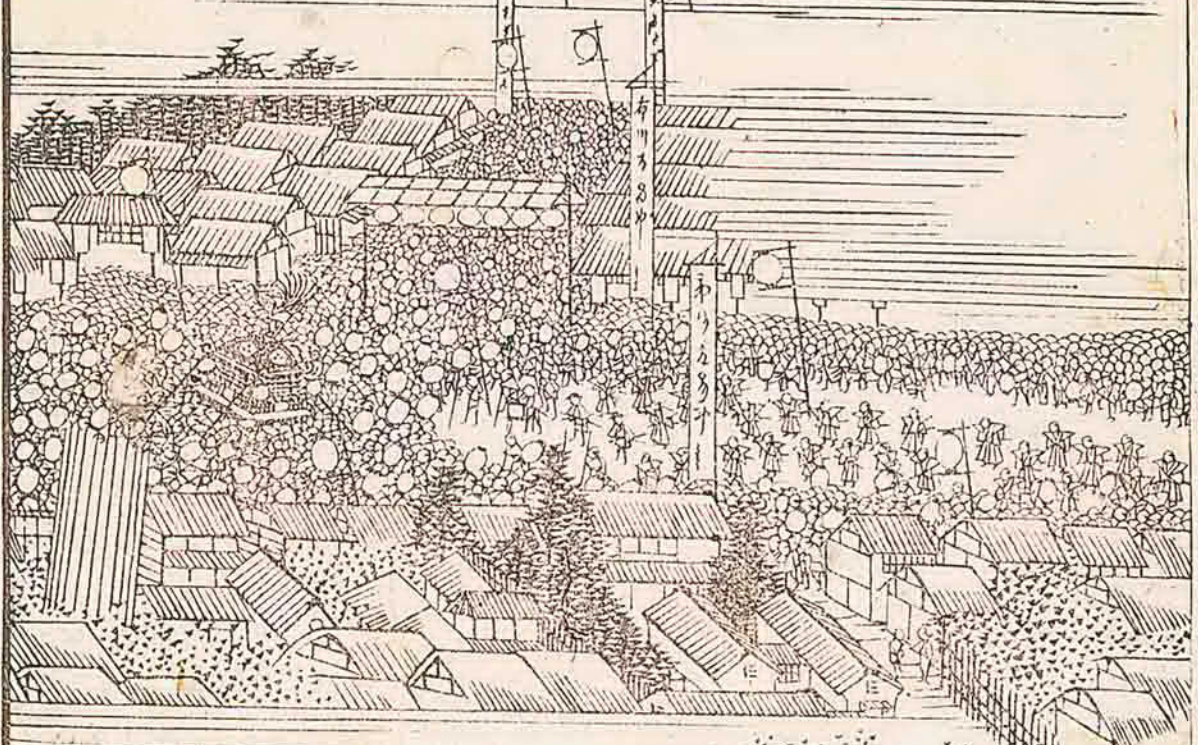
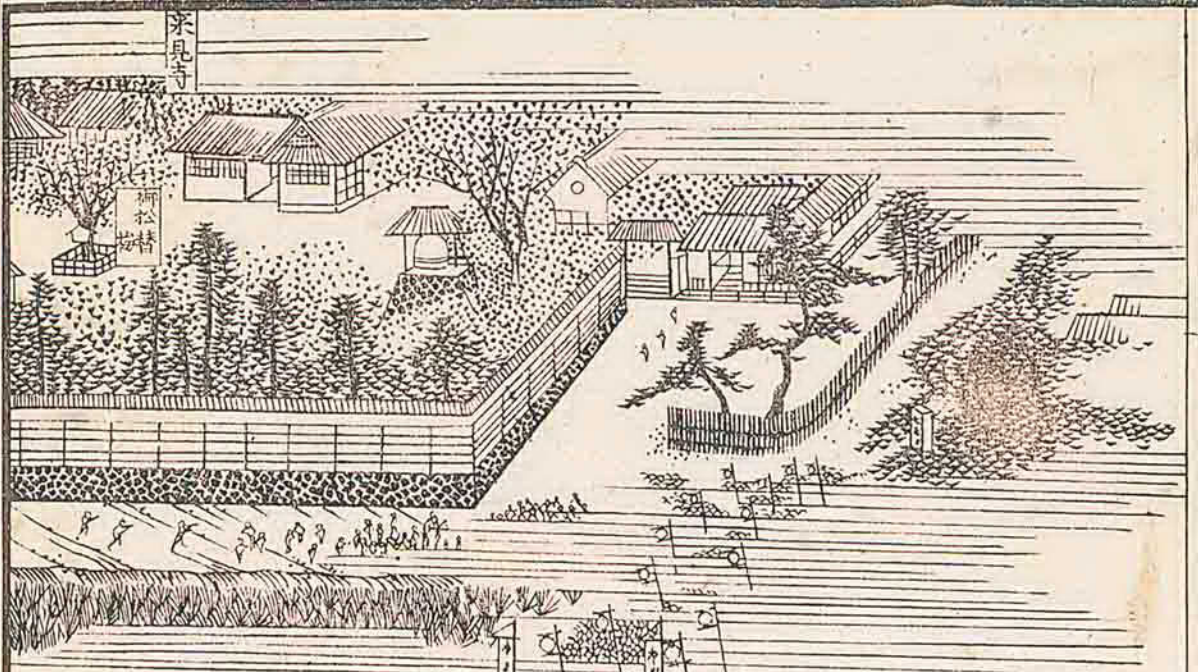
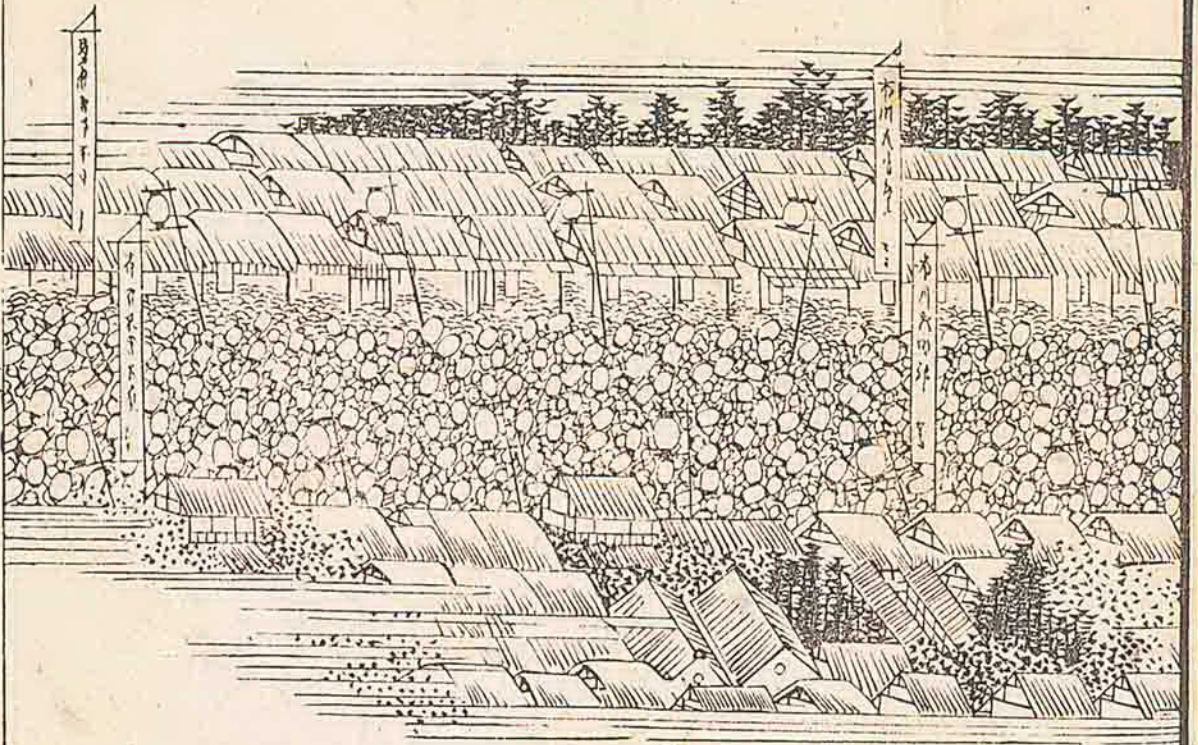
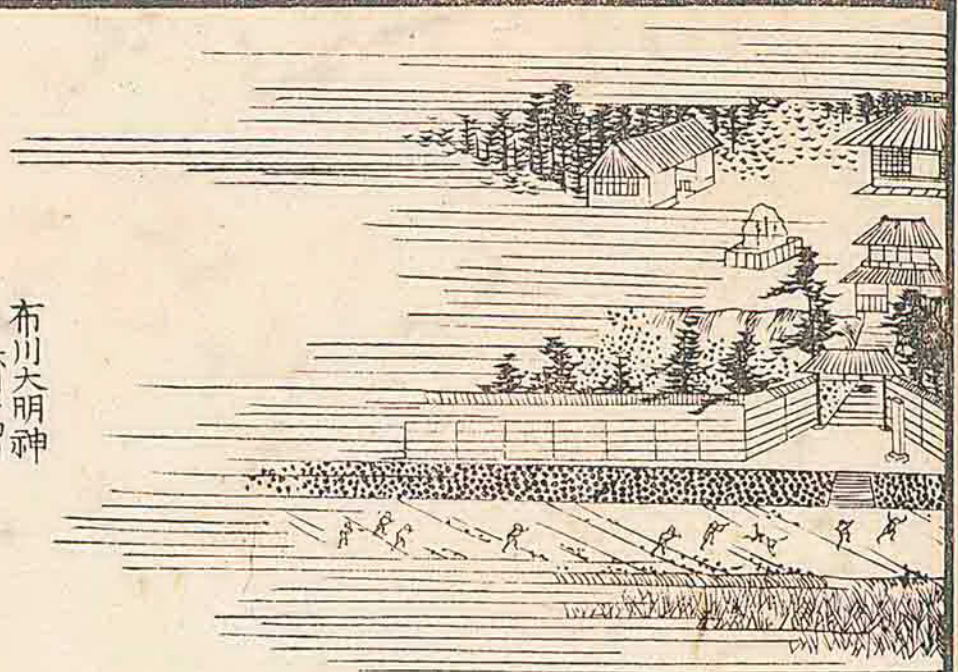
る人戰栗すこの時船中にて八九歳の男子數人を一て地舞を

舞ハ一む鶴龜鹿猿龍等の面を被る中にも蟒蛇の姫を吞まむ

とするを山伏の防護る状を爲すハ素盞鳴尊の故事を學ぶか

るべし舞の狀笛鼓の囃等至て古風あり

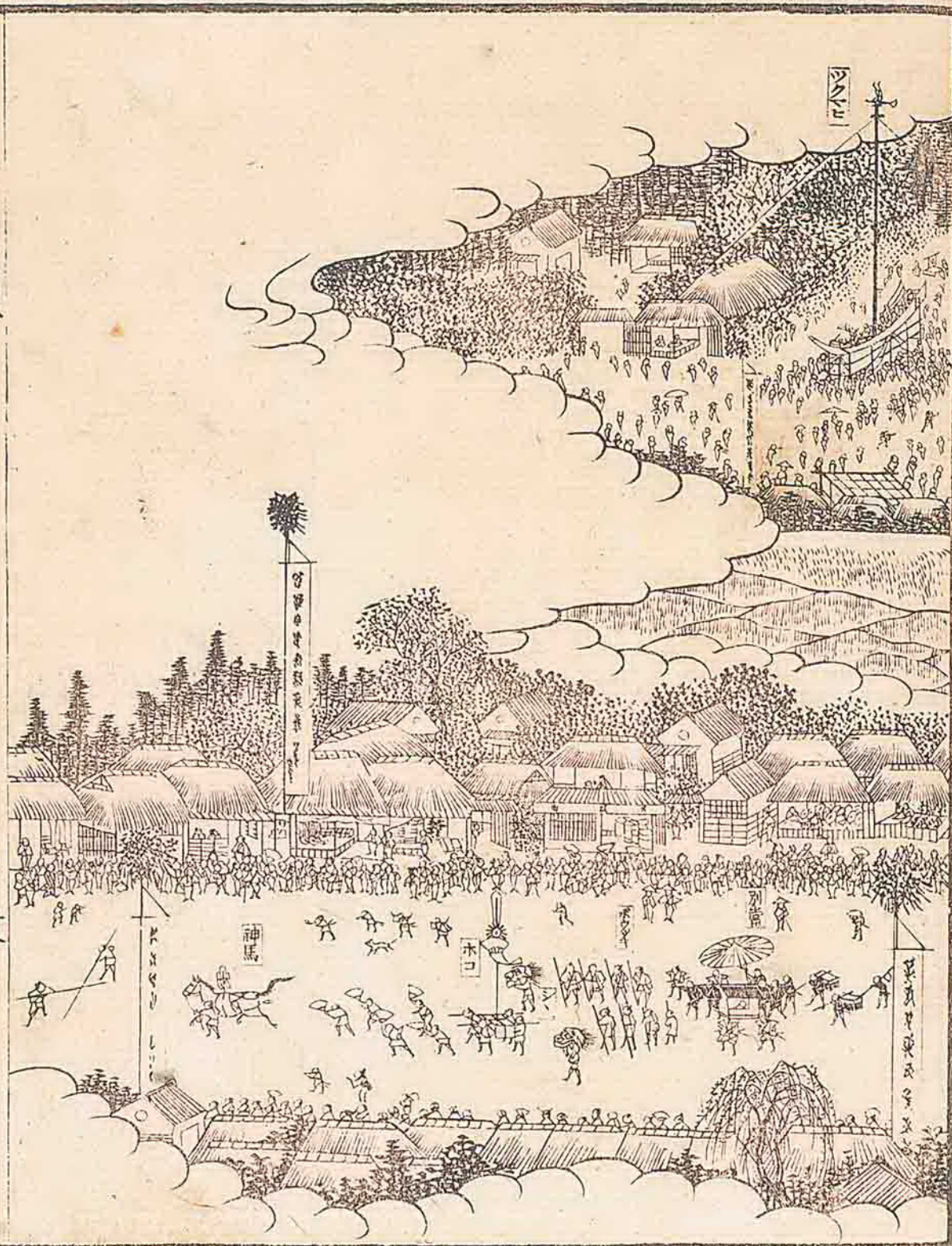
布川大明神
六月十四日
宵祭の圖



宗見寺

柳松精

三川北



土

六月十六日
 布川大明神帰輿并
 ツクミヒ圖



暮年修志多入 盛

楊子二身身就
多身身身身身身

楊子二身身就
多身身身身身身
切身身身身身身
切身身身身身身
切身身身身身身
切身身身身身身

貞和
 氏
 名
 録

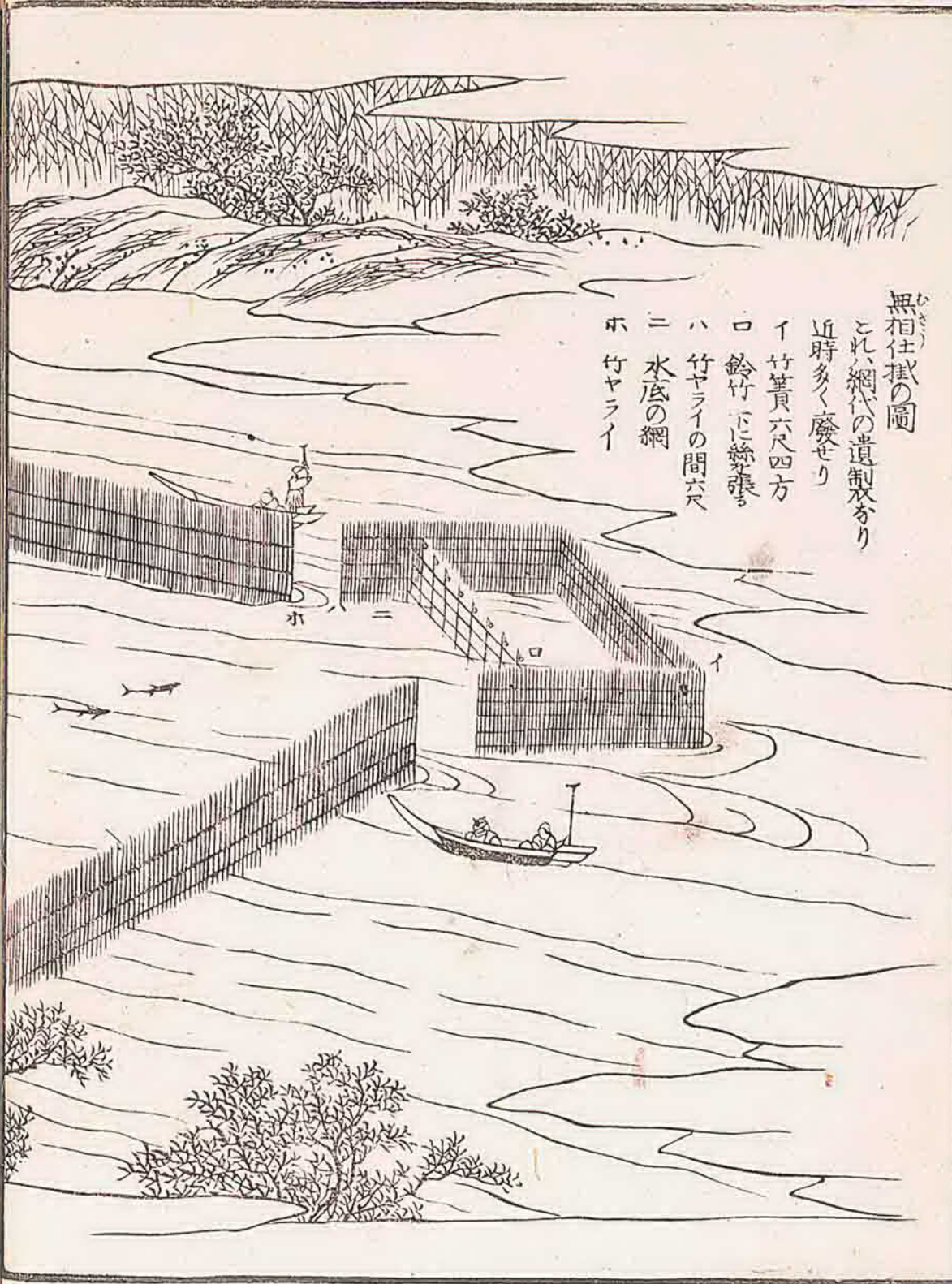
布佐
 傳
 之
 考

布佐 布川より渡場を南へ渡れ、ハ布佐、郷あり、倭名鈔相馬郡の
 郷名ハ布佐あり、總國風土記下總國相馬郡部云、布佐郡公穀七
 百六十二、東三字田、假粟六百九十二、丸五毛田、貢牧馬之駿
 と見ゆ、古語拾遺ハ天富命更求沃壤、分阿波齋部率往東國播殖
 麻穀、好麻所生、故謂之總國穀木所生、故謂之結城郡、古語麻謂之
下總ニと有れ、バ由來あるべき地名ながら、未考へ得ず、この地
 中葉和田氏の有るて、布佐の高臺より手賀沼へ行く方ハ今も
 和田前といふ地あり、その後、田部主水棲きて、千葉家ハ屬せり
 常總軍記卷十九云、かくて義長岡見家臣栗林下總守四方の調畧心の如
 くあり、一ウバいざや勢を出して、千葉を攻め、かの輩の軍の援
 をも見むとて、中畧、岡見の手勢三千餘を差加へ、都合五千餘騎
 天正十三乙酉年二月三日、首途して、乃存川へ押來て、豊島紀伊
 守ガ砦へ入る、頼繼迎として、羽根野まで、家臣菟田與左衛門三

無相仕掛の圖

これは網代の遺制あり
近時多く廢せり

- イ 竹筭六尺四方
- ロ 鈴竹正に絲を張る
- ハ 竹ヤライの間六尺
- ニ 水底の網
- ホ 竹ヤライ



サケ川をより来り進
く竹ヤライの中に入り鈴
竹の下横に張りたる絲
に觸るれば鈴鳴るこの
時長竿を以て水底の網をあげ出路
を塞ぎ左右の網が追込してしる多り
竹ヤライ竹筭の間あきたる小舟を
乗込む處あり

十餘騎来て來り案内して城に入る 中畧 かくて義長二月七日
發向す先府川を發して利根川を渡し布佐を攻懸るその頃布
佐砦ハ田部主水ありけるが櫓上てこれを見る敵の兵を
の數いくらとも計り難くそも案内の先手ハ誰あるむと見
ゆるふ旗の紋ハ丸ふ五桔梗を紺ふおきて白地あり銀の籠目
の馬印きらくと閃きくはさてハ府川の頼繼が常陸ふ味方
して攻來ると覺えまり豊島ハ案内知透しこれハ油断あり難
し先矢狹間を手配して弓鐵砲をかけよやと走廻りて下知を
爲す然るふ桔梗紋の旗と三釘貫紋の旗 今荒井氏ふて丸ふ見
二釘貫の紋を用う
えくハ櫓より聲かけて當手ふハ府川の御勢をむけられ
と見えたるふ一流紋の替りたるハ誰人ふて御入らうと申し
ける時ふ洗革鎧ふ星甲を着し葦毛馬ふ白鞍おうせて打乗り
白き麾を手に握り鞍蓋ふ衝立てこれハ常州新治郡小野崎の

新井總殿介信淑 淑ハ治の誤と申す者ふてハあり頼繼とハ叔
考ふべし 姪の好ありて遊客する所ふ頼繼折柄居城離れ難く陣代と
て某に向てハ櫓の上の御款待近頃以て面白うらず木戸を御
開有て見參ありむこそよき亭主振と申す物ふてハハめと思
ふ儘ふ欺きくハ城の木戸を固めし若殿原堪へう収て一文
字ふ木戸を開て突出てけるを新井下知して相懸ふ懸て散々
ふ戦ふまり未勝負分さざるふ先陣ハ谷田部の岡見主殿が臣
遠藤又右衛門百五十餘騎横鎗ふ突入て微塵ふおれと戦ふふ
城方固より小勢おれハ終ふ突立ちれ城ふ入り弓鉄砲をか
けて防ぎける義長遙ふ見て 中畧 布佐の押として牛久の家人
村岡半左衛門塙庄右衛門并高崎小莖の旗下都合三百人を殘
しその外ハ武者押して平岡小林笠神以下ふぞ向ひれる
芭蕉翁鹿島紀行云日既ふ暮う、る程ふ利根川の畔布佐とい

ふ處不着くこの川不て鮭の網代といふ物巧て武江の市不
齧ぐ者あり宵の程その漁家不入りて息ふ夜の宿醒一

この網代ハ水路を妨ぐるを以て是を廢て今川側不網代場の
名を存せり下不六軒新田あり是大森ある宮島氏の有かり

の宮島より來りこま天地渡あり渡守布川不在りこの處布
川の方古深うり一が寛文

十年新利根川の入口を塞ぎ切を流しより布其處不沙岩
あり未全く化し畢りさるふハあり收じも頗固くして小松屬
尾竹卷柏石斛石苜蒲等を植うるふ便あり

六軒堀 六軒堀ハ手賀沼の下流不してその傍ある六軒新田よ
り名を得りその利根川不落つる處ハ木下の前あり

手賀沼 印幡郡不在り東西三里南北一里許その兩源西の方か
るハ十大夫新田より出で小金より我孫子不行く間
呼塚不てその橋を過ぐ南ハ南相
馬栗野ある入道池より出づ又一源あり南相馬金山より出で

て北不落つこれハ淺間堤
より東あり淺間堤その中を塞ぎさり一が今ハ
断えて島の如く残れりこハその長を稱めていへるも老
ハ相馬郡淺間前新田不因れる者々享

保十三年高田友清といふ人家財を捐て堤を築きて二万石餘
の新田を開き一也忽そこを高田堤といふ由を高田與清が松

屋叢話等何くれの著書不載せて殊不相馬日記卷三不
つきあせし手賀沼つみくむといふを言田の名やハかくる 源與清

といふ詠歌さへ出いれど若ハこの淺間堤ありむ今知るべ
からずされどその後と公より力出いひて今ハ沼の畔の地

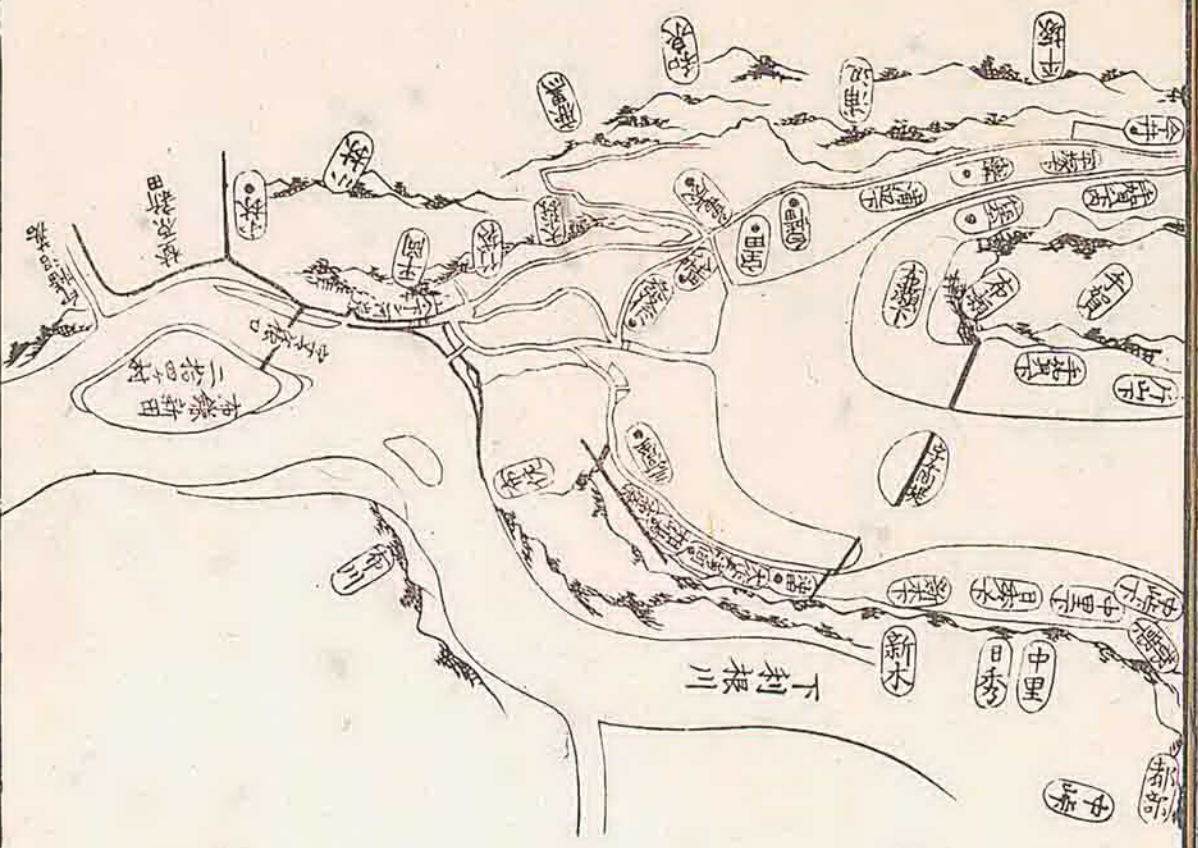
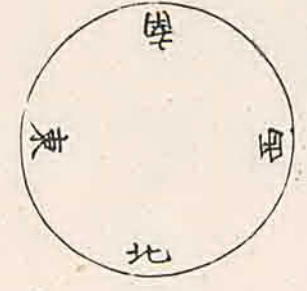
大率緑疇とされり沼の下流ハ發作新田の飛地を夾之六軒新
田の傍を経て木下不て利根川不合す

この沼の産物ハ水鳥鳥類ナガアチ
等又雁鴈等鰻鰻夜漁す故不ヨムナギ
といハ江戸不ても賞

とぞ鮎小蝦秋ハ麥園の培池と多ハ乾
貯ハツサカ網不てとる蓴菜等ありその鳥
を捕るハ張切網を以てすこハ九月下旬より二月上旬の間沼

手賀沼全圖

○新田



三川南

大

畔三十六村の人々この内十一村を下沼組五日目を當日と定
め晴夜を待ち雨日ハ次布瀬村の告を待て發す網二十段を一
人前の業とす網一段廣十九各その信地あり岸より潭不向い
次第不竹を植て、網を張る不十段これを二重不すこの網を
張る事全岸を闊さぐすを以て鳥皆沼中不集まるこの時布瀬村
の人繭繩を水中不流すこれ不再驚きて沼畔不飛行きて沼周
の衆網ボタナカ、不嬰るを潜ひそまり居て捕るありこの二ハ相須あづの業を
るを以て共不その約を爽まふ事か

附手賀沼北邊紀行こハ義知ガ友人某松戸を過ぎて布川不
せる事のこあれば精うり紀行ふり固より経過の中に見聞
しる載せり文中不地名多うるハ地志好む故あるべ
安政二年乙卯十月江戸不ハ地震のさとぎ有りて心静からず
訪來る人も希かれハ却不暇ある心地一てさらバこの間不下
總の布川かり行きて見むとて廿五日吾ガ本所の崩れる家

を後あと不見て深川高橋の東海邊大工町あるサイカチといハ處
より小名木川不舟うけて新川の宇田川柳庵がり行きこり主
いとく喜びて例の鮮魚求め出てつ、盃一ばく巡れりさて主
ガ詠こて出せる詩

不料今々有君來萬事匆々且勸盃
定識探勝不可禦、輕舟明且向鴻臺
手と拙らずぞ有りるそハ大門と字せる舟人呼びて國府
臺より松戸の方不行むと約一つればかり大門ハ桑川ある
葛西城古迹の大門不居るから不然名づけつ夜あけて例の大
門不船さ、せ妙見島を後不か一松戸の方不派る
拈はかき甲ゆりおひかり河のあまも河のこゝも

か、る歌ハ人の誰う誥ふべきと思ふるへらるれど實ハ此處
の真景まふれハ後の思出草不載せり國府臺不到る
風ふうハ霜ふらハまるの村紅葉

かくて午時頃ひるごろ小松戸つ小著きぬ舟をハ大いよりえ一岸え不上る
こ、も家い崩れて人らうせぬといふ小金こ小歸くる馬ま雇やひて乗のり
りこの邊そば大率おほひ水戸の君の御鷹場おんたかばあり道の側そば村紅葉あかば浅く深
く深めていと興おこあり

何の木とかの木といへず紅葉式

孩こ兒ご拳けんの葉は他のより色深く深こり

於人おもあやえらむよめのそめもちのいろはちくすて

寺ありそハ諸國圭齊録下總國卷小高七十石禪宗葛飾郡小金
卿萬滿寺といへる者あり高田與清鹿島日記れいげん小馬橋といふ里
小慈雲閣おんじゆんかく万滿寺といふ大寺あり靈驗れいげん尊えんきん剛ごう神立かみとせりふ
といへる處ところありゆきくて小金小著きぬ一月寺いちげつと崩れくりこ
の處ハ諸國圭齊録同卷檀林部小三十五石葛飾郡小金東漸寺
亦また不ふ曹洞宗そうどうしゆ小十石葛飾郡金卿慶林寺二十石葛飾郡金卿廣徳

寺三十石葛飾郡小金鱗崎村東福寺法華宗小十石金卿平賀本
土寺つち亦またど見みえまと近ちかき邊へある栗澤くりさわ小式内しきうち茂呂もろ神社しんじ有りとい
へど得行とくうで止とまりこの處ハ古千葉家の臣高城たか越前守えぜんしゆの
城しろ邑むらありが後のちハ原肥前守胤継はらえぜんしゆいんけいの子こ二郎行朝にらうぎやうてうこれ小居これ
りそハその系譜けいぶ不行朝ふぎやうてう又号またなづ友幸ともゆき居ゐ小弓城こゆまぎ大永年中たいえい真里谷ま三
河守武田豊三ま与よ行朝ぎやうてう數歲争戰すうざい真里谷武田迎源義明合戰ま遂つひ陷おち
生實城なまざか行朝者退入なまざか高城氏たか所守しよ小金城こと見みえまりの後のち矢葺やぶき
大膳おほの居處ゐとありが千葉家ちや小背せなる小因こりて豊島とよ紀伊守きいしゆ
成田なりハ郎武田左近なりをして伐きとめる事常總軍記卷十六なり小
見みゆか、る古迹ふると尋ねまふれれど冬ふゆの日の短みきふ心こいそ
ぎせられて前の馬夫ま小數かず頼たのみて我孫子わが小行こくべくあり
とれば見みずて止とまぬ志しバて小金原こ不入ふる許多あの人の道みち記
ふと見み一いつに野邊の小春はるどと遊あびて最も面白おもしろき由よしふれど寒風さむか吹ふき

わさる夕暮おればわが乗りさるより外、ふへ馬もあらずかの
鹿島日記ふいひさる臘脂鹿毛の神馬ハ今も有りやあど思ひ
續け行く小枯野の景色緑の松ふき不ひてその状いそむ方ふ

いづちのつうぐのてりそひて蒔繪ふゆるねえいふ

野へ名残おく枯れわされり風小尾花の波うと戦ぐ方も有り
相ハところ不合ひてや太く高くして上ふへ緑の枝蓋の如く
さし覆ひさりまぢりて夕日の方不遥ふ富士峯を見出でさ
るええいそめでさし天際ハ臘脂ふて一文字かきさむ状
不平ふる間不常の形おから思ひよりさ小く頭の方狭くて
詩も歌もいひ盡くすまかり見る中不雪の如見おされ
しも灰の如くふりて入日の空も淡墨色不爲りぬ風さし少吹
出でとり

ゆく方いづ路遠くやとふ小金の原の冬は冬ま

惜こし日も暮おるり足も馬の上ふてわが物おらぬ心地ぞす
る道の傍お消石造る處あり鹽も多く出づといふ我孫子小著
きぬ小金よりハ三里ありいかで遅うりさど宿の人やいか
我孫子てふ名ハ古聞こえさる處ありいかに城址やあるおど
問へど得知らず近き頃まで世も在り勘七といへるハ大カ
ふてある時角カ人を馬に乗せていそく論トて竹林の竹を折
り挫ぎて犢鼻禪と爲しつゝカ競せむといひうばいとらわ
びて角カハえとらふありぬといふ鹿島日記ふこ、ふ来る路
相といふ里も手賀沼を渡るといひこれどわが親歴し呼塚
ふて手賀沼の水源をわとりさり曉おきて昨日の馬鹿ひて
出づ水戸道の岐路あり右ふとりて高野山ふ入るこハ安永ハ
年五月仙臺徹山君の

五月雨のをやまーひまとうちくとりさごうふえぬ遠の村里 徹山君
と詠めぬへるあさりふりいで異ふる事も無かりーやと問へ
ば今年ハ例より青頭菌多く出て梨李桃歸り花多く開き地震
ふりー十日許前より雞埒ふ棲まで梁ふ上りてとふかく不困
トよりーといふ風景よき處やあると問へば右の方ふる我孫
子新田子權現社へ手賀沼をうちこー遙ふ大井戸張兩新田の
兩岸の上ふ富士峯を眺めて風景いとむ方無ーといふ日秀新
木を并せて芝原といふ常ハ此處ふて馬をつぎ代ふるあり右
ふ淺間山あり布佐村の有ふりその前ふる新田を淺間前とい
ふその東ふる相島新田の井上氏ハ開墾ふ功ありー家といふ
左利根川邊ふ布川の飛地ふる江藏地新田あり布佐ふ到るそ
の村ふて臺といふ處ふりこれぞ古の跡ふて今の村ハ漁村ふ
りーといふ處々ふ御林ありふ奉行けバ左ふ一里塚有り佐竹

家ふて水戸を領せー時の驛路の準ふてこれより龍崎ふ行き
ーといふこの邊ふ和田前といふ處あり和田氏の城址あり文
政二年の頃そこより石櫛を掘出ー、ふ中ふ長き刀銅佛と石
一片有りきその石ふ忍和田氏墓右傍ふ明應九年本月日不知
文政ニ乙卯歲四月建之と鐫りて和田ハ幡と稱ー布佐の正藏
院ふ祭りて有りとぞ猶行けば利根川左ふ見ゆ去バー下り居
て憇ひつゝ去、らの物語す我孫子より布佐までハ三里十町
ありことびの地震ふ布佐と布川と家損ねざりそハ皆井を掘
るふも地下の柔ふる處ふりとげふ江戸ふても家の甚く壞れ
るハ古川の迹若ハ蘆場を築き固めざる處とお不ーふ不思
へバ今年ハ處々ふ彼岸櫻梨等の歸花多く開き栗枿早く熟ー
殊ふ九月の晦ふハ烏鳶中空ふ噪き行きーをさる前表とも知
らで十月二日の災ふ罹りぬる最うれさー川の向ふる立崎羽

接小鹿島
治亂記の
手賀の常
州麻生の
手賀ふ
てこのの
手賀ふ
あらざる
べー

中等の村ふてハヤマカビチふといふ蛇どと蝮とさるが蠱き
出てこれと寒くて行きと得さりハ九月晦の事と聞え布川
ふて井幹の中不俯して聞けば數鳴りハ十月二日の事とぞ
この道すから手賀沼數見えを以てその周の事とを問ふ
手賀沼の南の村々を名つけて手賀島といふ舊ハ五ヶ村あり
古ハ島ふや有リルん鹿島治亂記ハ故府中幕下小高麻生手賀
玉造武田小川島名木ふど見えこれバ古き地名ふり此處ハ御
墓場といふ處あり原越前守墓ふて子孫ハ篠原と稱ハ江戸ハ
在り來りて修復を爲すといふ想ハ小金城ハ居る原二郎
行朝の後ふる尋ぬべー布瀨ハ千葉系譜ふる大介常重の傳
不同大治五年庚戌奉寄進相馬郡布瀨郷於伊勢大神宮といへ
る處ハ一て布施ハ非ず金山落の川の東ハ江戸より行徳ハ
幡釜谷自井を経て布佐へハ大森木下へハ行く路あり香取日

記ハ白井より木下の岸へ行くハ近き道有りと教ふる人の有
りて龜成といふへ出づ左ハ手賀沼とて大ふる沼あり潮ふら
ぬ流といひつべー細く長き堤をゆきくて木下の川邊ハ至
るといひ者ありこハ大森の本道をバ經ざる方あり發作新
田過ぎハ弘化三年丙午の大水ハ菰の根の結ぼれさるが丘の
如く流れ來り人家の庭ハ入りてそを除くふいと困トさり
とぞか不問へバ印幡沼ふと有る事ありとぞ修めて葺田と爲
ハかバいかにと思ハかりふ不行ルバ布佐の渡場ハ出づ此處
人家建續きていと賑ハ彼方ハ布川の家々際ハく立並び
りこの川寒き朝ハ氷碎けて流れ來るといハ武藏の玉川ハ
さる趣の說あれど彼處の玉の義ハ然らず此處の氷の玉の如
くからむハ玉川といひつべくぞお不ゆるかくて布川ハ渡
り中宿ふる赤松義知がり著きぬハ廿七日の巳時あり主ハ櫛

州甘繩城主ありし赤松次郎則村の後、何の時、此所、流寓せしやらむその始、確からず、年ごろ利根川圖志編集の事、不勞きとる人あり、主妻竹待付て甚く悦び、長女のかこといへる、そが夫ある、印西吉高の惣右門、まゝ二男宗碩、小貝川の西、ある高須、不居とるが共、不その邊、ふて漁せる魚、蝦、持來りて饗す、季女のちうといへる、今年十二あるが、文選素讀、一さして來侍す、猶利根川圖志の成功、ふ心合せて、臼井城圖作りとる、大川書成が子、不て此地、不養子として來れる、杉野周治を、訪ひつこ、ら見廻る程、不家ごとの園、まゝ庭の中、不藁、かど、不て、小社を作り、幣をさし、前、不秦皮、かどの樹を植ゑ、注連をはりて有り、氏神社といふ、大率九月の内心の儘、不日を擇びて祭ると、おむこ、い、かべて、この邊、不する事、不て、舊の傳、こを絶え、され、庭中の阿須波神、不て、田舎、不、い、古風の残り、とる、最めて、こゝ、又、この邊

の寺社、不、い、絹、不、て、三角の袋を縫ひ、下、不、括、猿、折、鶴、かど、連、ね、て懸けて有り、こゝ、女子の縫ひて納むるといふ、こゝ、骨董集、不、見え、とる、浮世袋、か、る、が、江戸、不、い、早く、絶え、とる、不、此、邊、不、遺、れる、と、い、と、ゆる、し、され、い、旅路、い、物学、不、益、ある、事、少、から、ず、又、農具、雜器、の、見る、目、新、し、き、と、あれ、と、さ、の、ミ、ハ、出、さ、ず、お、む、こ、の、邊、い、古、か、べて、文、間、と、言、ひ、ひ、り、され、い、子、飼、川、落、口、よ、り、あ、か、と、を、小、文、間、と、い、ひ、い、る、不、因、り、て、文、間、川、の、名、と、起、れ、り、そ、い、常、總、軍、記、作、れる、松、好、菴、紀、卓、が、著、せる、掃、溜、集、卷、三、不、美、丸、と、い、ふ、人、の、説、を、あ、げ、て、下、總、國、一、中、ニ、フ、三、マ、川、ト、イ、フ、名、所、ハ、出、テ、タ、レ、比、歌、所、ニ、テ、モ、今、ラ、ズ、此、度、此、國、へ、來、リ、テ、考、へ、見、レ、バ、今、砥、臺、川、ト、イ、フ、川、ニ、相、違、ナ、シ、ソ、ノ、故、い、文、間、小、文、間、ノ、間、ヲ、流、ル、川、ナ、レ、バ、文、間、川、ニ、違、ナ、シ、ト、い、へ、り、か、不、考、ふ、べ、い、主、の、意、最、切、か、り、され、ど、家、の、事、も、思、ハ、る、れ、バ、下、畧

川菜

水苔 條名鈔

古今集のみにあらずもあはれきり



春若葉を
生ト長き
一尺斗り
六七寸水中あり
白き花を開く川沿ともあり
む水深き所ありを白河の



大森 この地古千葉家不屬一中頃豊島不屬せらる布川來見

寺の寄附狀不その名見ゆ今ハ八幡釜谷白井よりの通路不

て稻葉君の陣屋あり此處ハ印幡郡の地あり是より永下河岸へ

雲冷山長樂寺 大森不在り寶泉院と稱す慈覺大師御作の觀世

音あり 縁起云下總國印幡郡大森之鄉雲冷山長樂寺本堂之千

當山境内地勢異他先東南谷廣岸高風聲響松樹梢常增行者觀

念西北岡平浦近鳥音和湖水浪恒勸道人心大師關東下向次序

此所御一覽有之精練功積修行德累勝地思召暫日於此所御修

法有之殊當州國師歸依一師尊教高德又無雙中累其御修法間

千手千眼觀世音尊像一軀并持國多聞侍二天以上三體大師

手自刻彫給安置此御堂中畧于爰中比當所里人森内家吉云人

有之法名曰善阿彌佛堂家富門榮時人褒美曰之長者兼信力最

深殊尊敬當山本堂修覆大鐘鐘樓再造脇侍二天絲色等建立奇

進其數甚多私云當所古者傳説云當寺是古昔慈覺開基之山
而寺内房中繁榮也衆徒十二房列檐並甍每日勤行以課役勤之
然近代亂妨時節悉皆亡滅所殘唯一二也隨而見堂内記又應安
錄嘉吉二年脇立緑色時節衆徒十二人名帳歷然云五分龍頭之
二年森内家吉が寄進せる小鐘あり高二尺三寸五分五分
文左不載す

敬白

下慈國植生西大木林鄉

長樂寺鐘禱事

右志者為天長地久

御顏圓滿伽藍安穩

興隆佛法 殊富地至

沐息笑延命

別者信心檀耶永吉

現當二世志地成訖

寺中老穩僧無斂示昌

惣御内兵衛泰平諸人

秋樂元進太願也

應安二年十月六日

檀那永吉 夜白

大工河内推守

鹿黒橋

大森鹿黒の間不あり古き唄入。お不森りめん。所鹿

くろを

橋面白。おもろや。水。川がさくさく不ながさる。此河の水源東

惣甫新田の方より流き出て西手賀沼へ落つ利根川の流とい

水逆行する由急さうさ不流るとい云あり

宮嶋勘右衛門といふ者あり先祖ハ安藝の宮島より來り此邊

の地を多く開きと云り今六軒新田不安藝の宮島より移

祭りといふ弁天の社あり

竹袋城山

木下の上不在り今と故井の跡あり井内といふ一家

の古書不この城の事をいへる者あり寫してこ、不出す

表書 當々 城まの石 水神の石

竹袋郷木下川など

城者

延長七巳歳佐倉城主

平將門殿常陸筋合戦之
出張城方將門家臣分
河下之香取郡元原領内
牧野々長者は名者牧
野庄司方其娘小宰相有
そ夫でねつゝる重寵依
ひとよろの城百よせ、
其のち天慶三稜のちり
國香か子の貞盛外ま
そ人ハ藤原秀郷の軍
うなき首ハ秀仁がとり
といふ事と是より忽落
城およびり

今佐原の隣村野村小御宿と
家ありた昔平新王將門のお
宿をいれたる家よびと故里
人の牧野のおやど家小將門の
ふりの稀ありあの家小將門の
セケ所ありて今社家の此祭
其いふ將門御重寵ふて此祭
召よせ置有るべしそ西大須
桔梗の前ふる物ハ西大須
村東三井寺の付物ふるハ西
同懐鍛ふる納めあるふる
猶考ふべし

將門が首 庚子二月とうたよ
延長初り返相馬郡

城のかさま九方より直
格五六丁横志二町より三町
へ井戸いさろふ東の方有あ
志大河谷系廻り浦後
谷と山つき墓前ハ控の神
あほりよめさうづせ

權神といふ處ハ井内の上在り石
神を祭り有りそこより石擲を振り
出せる事あり

其城山中段千葉の侍佐なる
と云く岩筋筋ハ河越いた
何たひとけりやみよのり
り其左なるさむらつか水
神石とたでヤ

圖畧之

右水神下とあり河をさ

す其時の糸あぎ登りき

地と出た怒りらく糸あぎ

登りきの所毎年貢納す以下畧之

水神社 竹袋城山東方半腹不在り古ハ亦不下不在りといふ

元徳四年の板碑あり千葉家の臣佐藤氏建つる所といふ



木下河岸 竹袋村の内あり常總軍記卷廿云今木下といふ名高

き所下利根川の岸ふあり是ハ竹袋より利根木を下すの名

かり然る小木下といへバ江戸ふも隠かく竹袋といふ知る人

無一云古この地纔ふ十軒をかりふり一が寛文のころ此處ふ

旅客の行舟世小木下茶を設けたるふ因りて甚ぐ繁榮の地と

爲れりその鹿島香取息栖の三社ふ詣一及び銚子浦ふ遊覧す

る人多うればあり問屋七郎左エ門六の番船を預り旅人の煩

勞をこたく

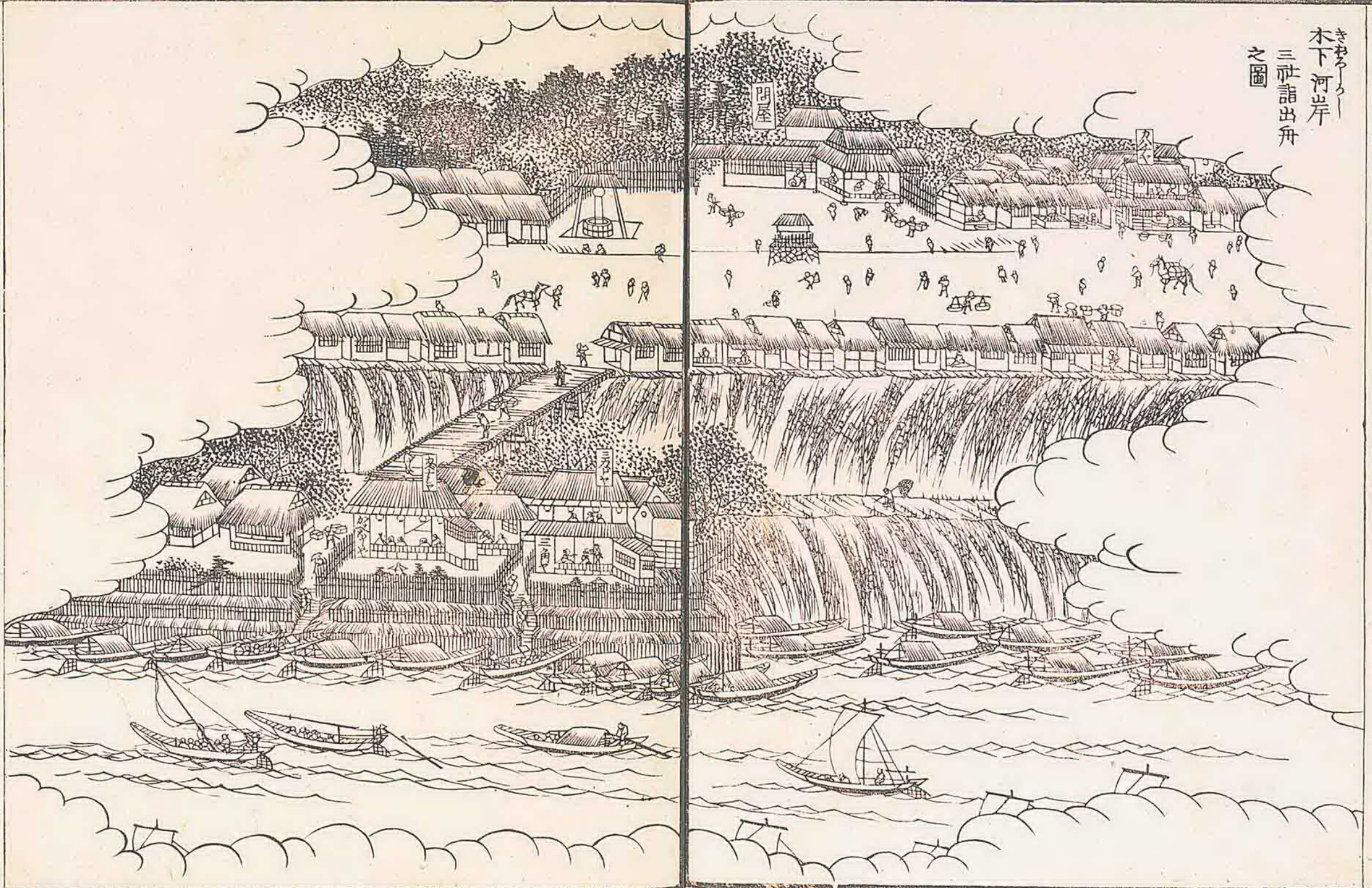
安永八年五月仙臺山君の鹿島道記ふ云前畧今日も日高く木お

ろし小つぎぬ十百木おろしを出て今日ハひめも花船路ゆく道

こなくまづ河岸ふのぞめバおとみの旅ふまうけたる船あま

とつかがり各二三の列を正してのりつぎを見らめがちぬり

きねり
木下河岸
三社詣出舟
之圖



むらさきのどづりかげしねまひ誰も見るあまきりほつ

里のあげやまきりのあづもあつたをさき里のなまぐこのふね
らそひえむとてきたれりこの刻をりより宇時で昨日の名
跡あくをうごまてえささささささささささささささささ
りよて細ひくを目の茶ふ鯉鮒あど漁を申ふ鯉ハ二さ
くふあまももあつ川の川よてとるるとはふあきりのとそいきり
ささるの家のあがわしそいふとびりゆけを岸の若ふさつき
たろが風ふただれあひくるまざりくもる

川風ふ波おろろこれあつたあもむをだにあひくまざり

貉池 并貉坂 木下河岸より竹袋へゆく道の左ふあり佐倉風土

記ふ在印西莊竹袋方百三四十歩中有葦菜池頭有貉坂焉東国
戦記所謂狸坂及狸池是也今ハ浅くふりて葦菜ふ一芦菰ふど
生茂り池の形のこあり堤を越て向ふの山ふ上る所を貉坂と
いふ是より竹袋本村あり

稻荷山神宮寺 竹袋ふ在り三寶院と稱す古ハ龍腹寺ふ屬せ

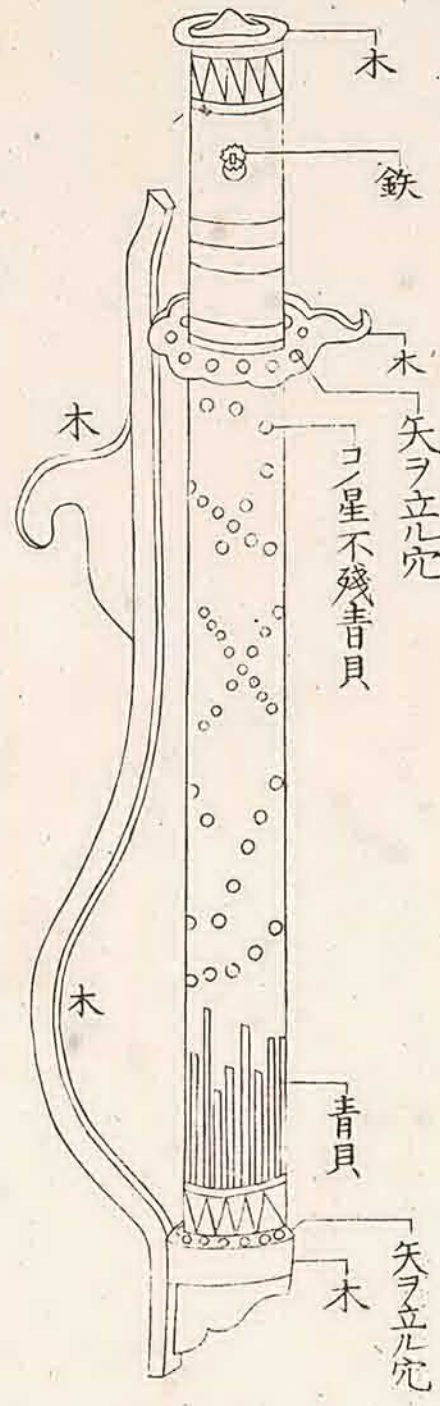
とあむ嘗て一家ふて當村三寶院開基記といへるを見り下
總國殖生西曰井領印西莊竹袋郷稻荷山神宮寺三寶院者應仁
元 丁亥 按ふ太歳ハ木星ふて譬へハ太歳在 二月日開基祐
善坊慈眼庵ヲ取立云と有り此の下ふ慈眼庵を神宮寺と爲
載せされどそハ寺ふと舊記の絶えたるふ因りて吾が本尊如
家ふの之甚く秘する事とて寫す事ハえ許さざりき
意輪觀世音 御長五の腹藏ふ在り一最勝王經等を見一七皆蠅
頭細書ありきそぐ中ふ佛說宇賀神將經の末ふ

本願聖竹袋神宮寺祐善社
下總國殖生西 齋内小倉村
齋濕 二日始造本尊記
應仁元年亥十

地藏堂 別所ふ在り金龍山寶泉院地藏寺といふ原或部少輔の

祈願所ありと云二王門の裏ふ古の二王像あり朽損トていと
 珍一又客殿の後の庭ふ兼安四年の板碑ありふの村ふ月岡源
 古衛門といふ舊家あり水海道の側板橋といふ處の城主ふり
 一月岡播磨守が後ふて系譜古文書等多く持りまごめづら
 一矢筒を藏む其図左ふ

矢筒惣長三尺七分 筒口より三寸五分斗り



筒ハ竹を薄くけづり紙ををりて黒ぬりふまゝると見ゆ
 もやうハ拙くは青貝あり

敬白

奉懸鑄下慈國瀧水寺推鐘一口辛
 右志者奉為 天長地久御願圓滿
 乃至法界多等利益也仍如件

遠武五年八月八日 所友

石神社別所地藏堂より西十丁むくり山の半ふくふあり陽石の形不して高二尺四五寸建仁□□□と多きり同村岩井彦右工門の氏神ありといふ

雲林山瀧水寺 瀧村ふあり本尊藥師如來仁明天皇の御願所兼和年中の建立門の二王運慶作といふ国司藤原朝臣千狀を藏を年号不詳又兼應三年相馬小次郎平貞胤の寄附狀明暦四年同昌胤の寄附狀等ありまこと古鐘あり建武五戊寅八月八日と

多きり

鳴澤 同村西の方ふあり佐倉風土記ふ云傳水脉潛通村中此水

盈則村井皆盈此水縮則村井皆縮矣

天龍山龍腹寺 龍腹寺村ふあり本尊藥師如來を安置を側ふ地藏堂あり大同年中飛驒工匠建るといふ門の二王元ハ慈覺大師右ハ丹慶の作といふ此寺舊龍福寺と名く釋名上人雨を祈り

一時龍死して腹を墜さの地ゆゑふ亦龍腹不改とりとぞむゝ志ハ七堂伽藍ふして村中ふ二十五坊を置けり遠近七十五箇寺の本寺ふてを大寺ありと云り其後兵火の為ふ灰燼とあり一夏東国戦記不見ゆ去文政元年七月又々火災ふ罹り一時銅の寶塔棟札一版を得たり則ち領主稻葉君より新ふ函を下し是を藏む其函ふ記して曰

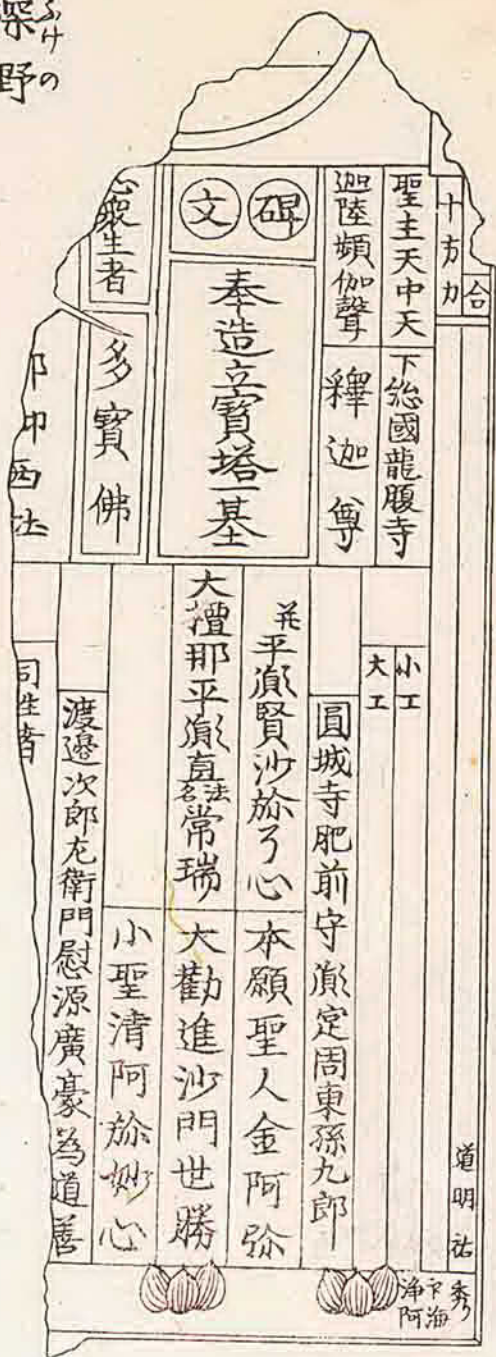
下總國印幡郡龍腹寺寶塔棟札一版以銅作之長一尺八寸幅八寸表背鐫字上頭元邊破缺不全背面細字漫漶不可辨嘉吉二年壬戌等字猶可讀其詳不可考據天和元年僧智祐所撰勝光寺畧緣起龍腹寺舊號慈雲山延命院大同二年九月曰僧空海之奏詔其後慈觀建七堂伽藍於下總國印幡郡 賜號曰慈雲山勝光寺延命院自後世為 勅願所延喜十七年大旱奉 詔祈雨驗有龍之異因改 賜號曰天龍山龍腹寺嘉吉二年國司千葉氏脩其

堂宇建五重塔永正五年二月塔無故倒時主僧覺道勸千葉氏伐北條氏而自聚兵於寺將以援之北條氏聞之八月遣潛兵夜襲擊燒滅之覺道死寺廢者五十餘年至天文十九年千葉氏復建諸堂以再興焉而比舊不及十之一云後二百五十餘年文政元年七月寺僧不戒火諸堂盡災於灰燼中得斯棟扎龍腹寺村以吾藩移封之後猶繇于別邑大森治郡奉行臣八太高之代官臣春名復等慨古蹟之湮沒喻主僧取棟扎以進覽公歎其漫漶不可續而悅舊物幸存一覽之餘乃新其函以還且使高之命主僧慎藏勿喪使臣楸記其事於函臣楸謹案棟扎蓋塔之上梁文也嘉吉二年壬戌距今年丙申三百九十五年平胤直高見王之裔千葉八世之孫滿胤之子為兄兼胤嗣無道臣屬多叛東氏圓城寺氏千木氏木村氏等爭推相分為二構兵康正元年八月十五日自殺于玉橋阿彌陀堂胤賢及圓城寺氏渡邊氏周東氏即其同族或臣屬也厚二分

天保七年歲在丙申十二月丁卯

儒官臣本多楸謹記

草深野

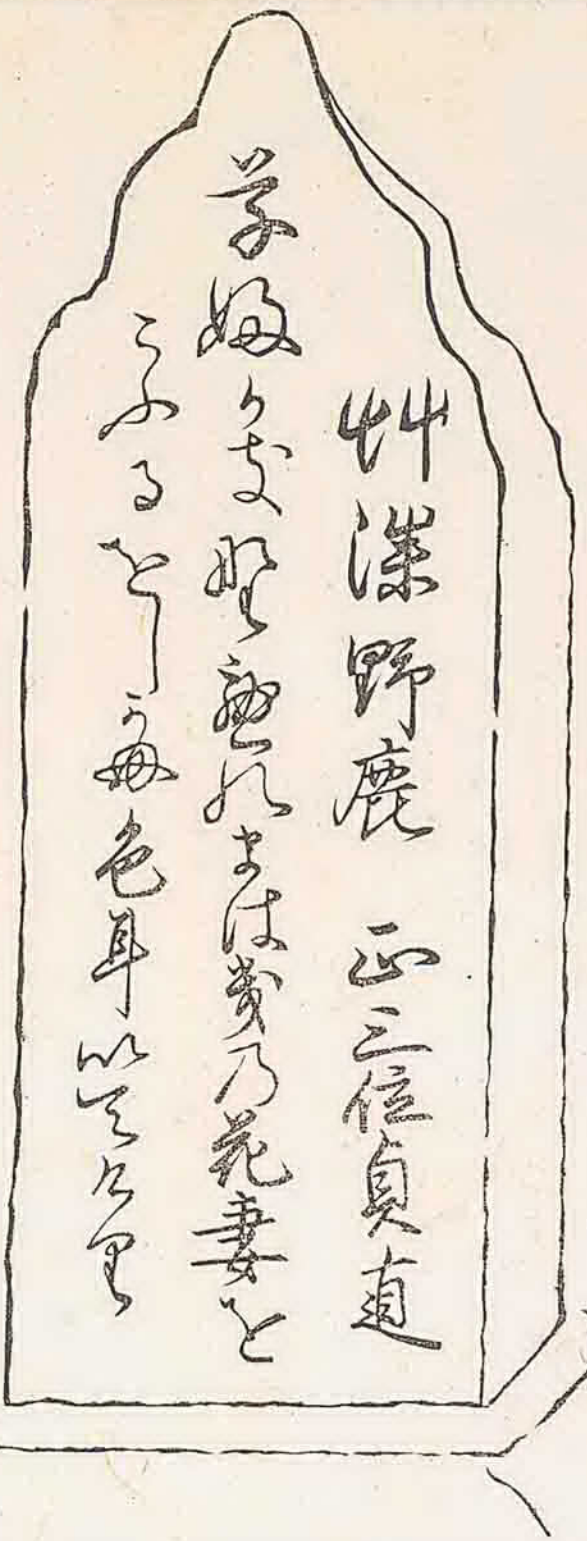


在印西莊見于東國戰記此原也東西六七里南北五六里六町環野村凡十餘鑪田也船尾也結緣寺也松崎也吉田也岩戸也大迫也角田也造谷也荒野也俱在草深野南起於坤終於震馬和泉也鹿黑也大森也別所也小林也瀧也龍腹寺也皆在草深野北起於乾終于良馬西僅通手倉野者總稱之

富小路正三位或部卿藤原貞直卿有詠歌尤小

富小路如泥齋藤原貞直卿

草深丸山觀世音境内之碑



草深野鹿 正二位貞直

子ぬりまはぬれまはぬる花妻と

ふるといふ色身いそぐ

下総國の香取の百合丸うとふら花をさそ

如泥齋

百合丸ゆりてくれはち香取の妻のそれ乃香取の名をけき

いそぐまをひ出く神志若くしてきつるよたかふるは歌とさしけり
はるるけふさ残ぬりよるこひのあやうのいそぐとをれそ
和もあるとそ

草深丸香取百合丸

雲の上のたはるより一と舞名も四のふとなくやきんえとらむ
を子明之今年文極文月の始都より

如泥の君若みいそふよりとねむれをりなるあともみふなぐら
こころめりねあそといふ舞とさへ下りけりぬ母屋の長押ふ
かこへき扁額不せよとて賜やなる夫との所ふあやうてふ
一けふさといふ物いそる残きとて

俳諧歌場紀真額

花若ふふと流るるいそふ深き百合丸形ひ乃ふりのつげ

二世

草深野鹿

翻園香取花笑

咲菘乃色身いそぐけき妻とさる草深野鹿けきを鹿け聲

印西合戦

常總軍記卷二十云かくて義長林岡見家臣栗兵をた

めて竹袋ふか、つて平岡へ出たでふ小林ふいさる小林十郎

元衛門が籠り一砦を責うごり天正十三年二月七日先陳府川の豊島

が陳代荒井縫殿助豊島が老臣根本勘助銀の小田原笠の馬志

る一を真先ふ立て関を造りかけてせめ勤うす小林ちつとも

さ日がむして敵をちうくと引付て弓鉄炮を一同ふをふ一う

け々きば真先の兵三十餘人矢庭ふ射倒されて人を楯ふ取て

ま、み得ず小林是を見て時分ハよきぞや突くづせと自らら

白糸の鎧ふ同ト毛の甲を差一鴉毛の馬ふ梨子地の鞆おうせ

打のり十文字の鎧をひねつて我ふおとらぬ若者八十餘騎前

後元右ふ立からべ天地もくづる、斗りどつと叫て突出る

ふさ一もの先手つき立らま入ふどれをついてくづきる新

井縫殿さいを打ふり蓬一人々城兵はとづくの小勢ふるぞ取

あめて一人も残さず討とるべ一と老きりふ下知をか一々き

共引立一兵のくせと一返一もせむ逃そ一る二の備ハ矢

田部の老臣遠藤又右衛門百五十餘人替つて突うへは小林是

を見て敵ハあら手ふるぞ附入ふせらる、ふと兵をまとめて

城ふ入るその進退のまこやうある支おのまが手足をつうふ

が如く小林下知して弓鉄炮を雨あられふと一く打うけ一

うバ遠藤も返きて、其日の軍ハ果ふり明まバ二月八日義

長下知して三の手四の手ハ笠神松虫ふせめう、る笠神岩井

庄太夫是を聞て城より三丁斗り張出して待うけさり三手の

大將ハ蝦原次郎三百餘騎相か、りふか、つて関をあげ弓鉄

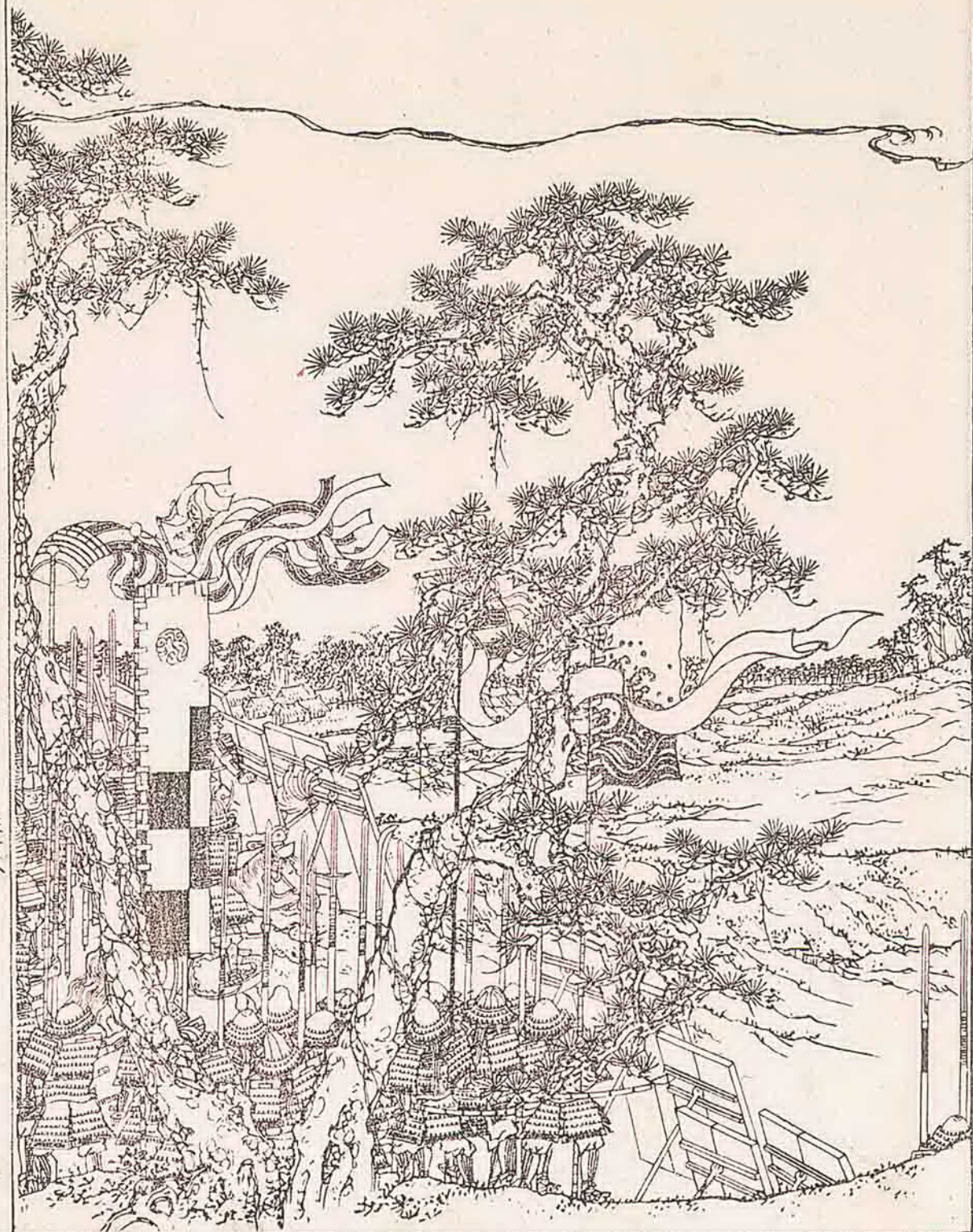
炮をそ仕うけらる笠神二百餘兵隠ふ関て待うけさり蝦原次

郎下知一らるハ手勢百五十騎ハ笠神う備の正面を責べ一残

る百五十騎ハ横鎖を入べ一敵ふ増り一勢を持て後陳へ軍を

譲らば何の面目有べき突破さるの共と真先馬を進て
乗出ま其手の軍兵何うハ以て猶豫べき眼をいらけて突懸る
笠神勢この勢へき多き一裏くづれして乱うバ蝦原が勢
大いさんで微莖ふおれと戦ふさり斯る処へ松虫民部三百
餘騎黒煙を立ちせ來て笠神を助け火出る斗ふ戦ふさり蝦原
が勢心ハ危さけふもやき其戦ひはうき一兵おれハあら手の
民部ハ突立ちきむつれて引退く四備あり一櫻井舎人
佐野早人三百餘入替て突りへま双方名ある勇士ふして名を
を一命をくしまず今日を限りと戦ひなり印西勢五百餘騎
岡見勢六百餘兵入ちがひくく千騎が一騎ふおるとても一足
も引べうら次と西ふむらめき東ふおびき巳の刻より未の下
刻不及べども勝負ハさらふつらざりなる天晴千葉と岡見の
地あらそひらふを限りと見へたりなる義長遙ハ是を見て自

馬を乗出一千餘騎を長蛇ふ立て二十備ふ分こり是五十騎一備と
大鼓を鳴して神出ま其有様誠ハ自余の備と支るはりてその
號令の正一き支敵も味方も感徴せり流石勇猛の千葉勢も此
備ハ蒸立ちらき四度路ふ成て見えうらバ義長大音あげて軍ハ
志をましたり関をあげよと下知まきバ惣勢一同ふとつと関
ぞあげたりなる是を聞て印西勢いふく心散乱しておのく城
へ引入りなり岡見勢猶も續て城を責んと返りけしを義長大
不制して此邊の砦を責るハ全く勇を志めまのこおて雌雄を
変える不及ハ次其故ハ千葉方の小砦五十八十責ぬくとも全
の勝利ハあらず佐倉城を責落し香取郡千葉郡を平げせんバ
大和とハまべうら次他國ハ責入さる合戦味方七千ふおれは
千葉ハ主戦ハして軍兵二万を過さり一人ふても益なく味方
を損ぜを加勢まへき味方なく敵の重地ハ入て死んど越度を



玉葉齋
貞芳畫

とる夏あるべし誠の勝利ハ佐倉香取千葉あり無用也とて
勢をまとひ松虫の墓不陳して大うゞを焼夜打の用心して
夜を明き是義長軍旅のかゝこき所あり斯て義長休足して
軍の工夫をあらゝり以下松虫の所いどせば

埜原新田

印幡沼の北畔あり里人十四ヶ新田といふ十四ヶ村あればあり
下畧して十四ヶとをうりといふ

此地始ハ笠神村御立埜原とどかへ貢米七十五俵づゝ上納せ

一埜原あり其頃ハ木下問屋仁右衛門々下より東南平岡小林

山ささより印幡沼まで見通しハ皆笠神埜原と唱へたるよ

古書不見えこり其後寛文二年新利根川掘割の節川筋不當る

村々々此所へ替地仰付らき十四ヶ村とあり寛文十一亥年

田堤出来同十三丑年御高入不成一といふ

吉次沼

埜原新田の内行徳新田といふ所の堤の内不あり云傳
むり一金賣吉次信高兄弟陸奥國不往來して此所を過隣村萩

原村不荒神左近といふ強盗あり吉次兄弟を殺して貨を棄ふ

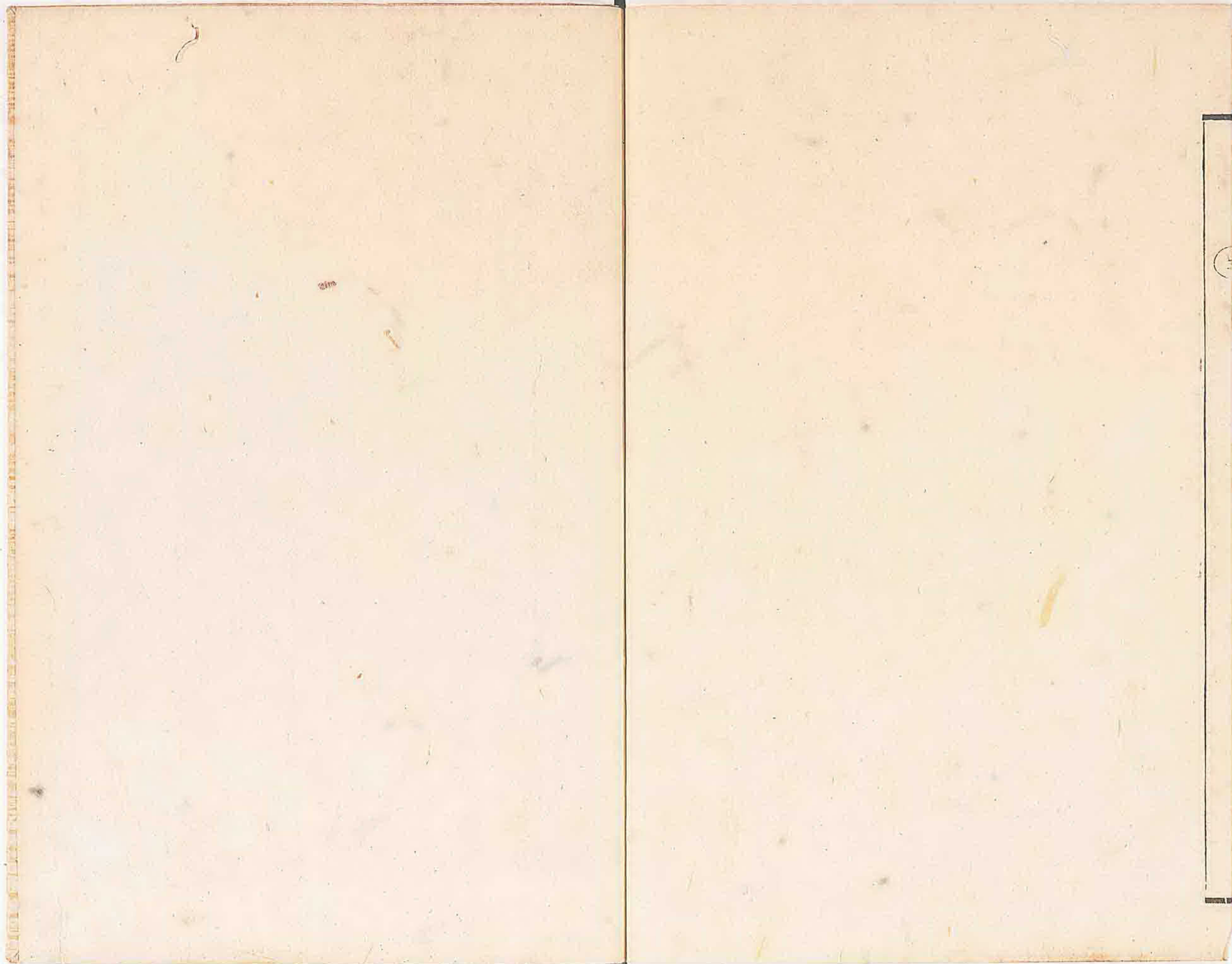
土人墳を作り樹を植て跡を去る次是を吉次の墓といふ寶永

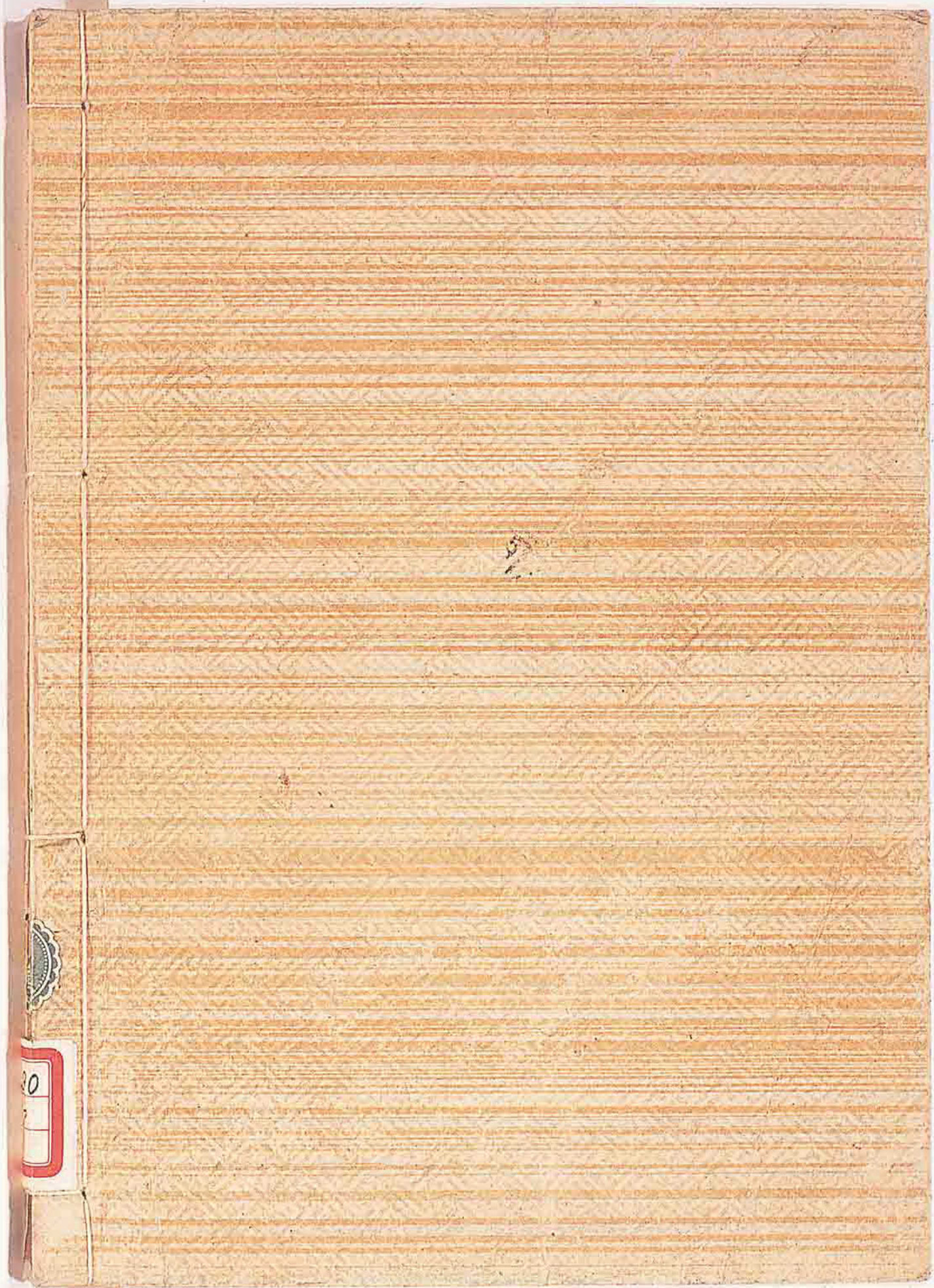
元年の洪水不此所の堤切き墓堀まくだれて押流さる其跡方

二百歩をかりぬ沼とある今是を吉次沼といふ此沼の深さ知る

隣村中根村戸崎といへる所不觀音堂あり十一面觀世音あり

是金賣吉次の守本尊ありといふ靈驗あらたあり





20